



実習用機械の寄贈式の様子

農業を志す学生のために 実習用機械を寄贈

～JA共済連 兵庫県本部の取り組み～

JA共済連では共済事業とともに、組合員・地域住民のみなさまが安心して暮らせる地域社会を目指し、地域貢献活動に取り組んでいます。さらに、各都道府県本部では地域の特性を活かした独自の地域貢献活動に積極的に取り組んでいます。そこで、10月号から3回にわたり、様々な特徴のある活動をご紹介します。



今年寄贈された田植機にはGPSのほか除草機能も付いている(左) 除草作業の実習を指導する先生と学生たち(右上)
昨年寄贈のトラクターは快適な操作性でフロントローダーも大活躍(右下)

最新機械の導入で
より実践的な経験を！

J A 共済連兵庫県本部では農業の担い手育成支援を目的に、平成二十八年度から三か年計画で、県立農業大学校と県立の農業高校拠点校へ実習用機械を寄贈しています。

より実践的な経験を積めるよう、学校側の希望をうかがいながら、農業大学校へはトラクターや田植機、イチゴ高設栽培システム等を、農業高校拠点校へは動力マルチ張り機や食味分析計等を寄贈し、学生たちの学ぶ意欲の向上に役立っています。

「機械の寄贈により、最新機械が導入されている現場でも、即対応できる技術を学ぶことが可能となりました。最新のトラクターは機能だけでなくデザインも斬新で、かっこいい！」と学生に好評です。ね」と北本暢男農業大学校長は話します。「このようにさまざまな機械や設備を寄贈いただくことは、就農を目指す学生たちはもちろん、学校にとっても大変ありがたいことです」



北本暢男校長
「就農を目指す学生たちはもちろん、学校にとっても大変ありがたいことです」

県立農業大学校
学生インタビュー

藪林みなもさん
1年生 専攻・果樹 非農家出身

大型特殊免許を取得！

高校生の頃からボランティア活動に興味がありました。将来の夢は農業技術を身に付けて青年海外協力隊として働くこと。実家は非農家なのでゼロからのスタートです。もちろん、トラクターの運転自体初めてでした。自動車の運転と勝手が違うので戸惑うことも多いのですが、昨年寄贈していただいたトラクターはオートマチックなので扱いやすく、そのおかげで大型特殊免許も取得することができました。

資格を取ることもそうですが、技術の向上が実感でき、毎日が新鮮でとても充実しています。

野菜も自分で育ててみると気づくことがたくさんある。小さなことでも、積み重ねていくことが結果につながっていく。それが農業のおもしろさ、かな。

夢は専業農家！
実家は稲作を中心とした専業農家なので、小さいときから祖父や父にトラクターに乗せてもらいましたが、キャビン付きのトラクターは学校で初めて乗りました。作業効率がいいし、内装もかっこいい。今年、寄贈していただいた田植機もスゴイですよ。GPS機能付きなので、田植えの経験が浅くても苗をまっすぐに植えることができます。農業機械も進化しているんだなと納得です。



衣本優時さん
2年生 専攻・作物 専業農家出身

◎先生のコメント



主任農業教育専門員
みよしあきひろ
三好昭宏氏

古いトラクターの運転はマニュアル形式ですが、最新のオートマチックを寄贈していただいたからは、女子学生でも操作しやすくなりました。全学生72人のうち20人が女子学生ですが、1年生のときにはほぼ全員が大型特殊免許を取得しています。最新農業機械の習熟実習を兼ねて、今年は近隣の集落営農組織が行う田植えを手伝いました。GPS機能が付いているので学生に任せても安心ですから。農家の高齢化が進むなか、農業大学校ならではの地域貢献にも取り組んでいきたいですね。

今は卒業に向けて稲作の肥料効果を比較検証していますが、卒業後はすぐに家業を継がず、農業法人などで働きながら経験を積む予定です。最新機械の運転等も学校で実習したことを活かしていきたい。将来は稲作と果樹栽培を組み合わせた経営ができればと思っています。

◎兵庫県本部インタビュー
「農業の担い手育成は、若人への支援から！」



JA共済連 兵庫県本部
運営委員会会長
いちむらこうたろう
市村幸太郎氏

農業の後継者不足が大きな課題となるなか、将来の農業を支える人材育成を担う農業系学校では、実習用農業機械や設備が現状のものよりかなり老朽化していることを知り、この活動を始めました。若い方々が農業の道を志すことは、日本の農業の将来にとって、すばらしいことです。農業で成功するためには、農業技術だけでなく、経営の知識など農業以外にもさまざまな知識が必要です。学生のみならずには、さまざまな機械で実習を重ねながら、日々の努力を忘れず、将来の日本の農業を支えてほしいと思います。

